

令和3年9月18日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム 令和3年度 第8回

おはようございます。コロナで皆さん大変だと思いますが、よく眠れていますか？ ズームで参加しておられる皆さんも顔っておられるので、大変結構でございます。先週の東京フォーラムで、コロナを乗り切るためにどういう対処をするか、少しお話ししました。私の実感でいくと、よく食べ、よく眠り、よく出し、よく動く（私は今年に入って社長業に復帰したので、また仕事が増えております）、これが出来ているかどうかだと思っています。

会場の皆さんはマスクをして参加されていますが、マスクは自分のためにしているのではなくて、人のためにしているようです。というのは、マスクをしていてもコロナはマスクをすり抜けて入って来る。ウィルスは防御出来ないので、完全な予防にはなり難い。ところがマスクをしていれば、くしゃみをしたり大きな息をした時に人にうつさないですむ。そういう効果、最近エビデンスという言葉を使っていますが、科学的なデータが大分まとまったようです。ですからマスクは人のためだと思って使われると良いと思います。

人 未だ自ら致す者有らざるなり

では、素読から参りましょう。本日は子張篇の16～18です。私の後に従ってお読み下さい。

そうし いわ どうどう ちょう とも なら じん な がた
【十六】曾子 曰く、堂堂たるかな張や。与に並びて仁を為し難し。

そうし いわ われ こ ふうし き ひと いま みずか いた ものあ かなら
【十七】曾子 曰く、吾 諸れを夫子に聞けり。人 未だ 自ら致す者有らざるなり。必
おや も
ずや親の喪かと。

そうし いわ われ こ ふうし き もうそうし こう そ た よ そ
【十八】曾子 曰く、吾 諸れを夫子に聞けり。孟荘子の孝は、其の他は能くすべし。其
ちち しん ちち まつりごと あらた こ よ がた
の父の臣と父の 政 とを改めざるは、是れ能くし難しと。

ここで氣をつけてみるべきものは、曾子は孔先生の言葉をそのまま伝えていきます。これは出来そうが出来ません。貝塚先生曰く、子游や子夏や子張といった幹部どころの弟子たちは、孔子の言葉をそのまま告げずに自分の考えを入れて解釈し、私はこう考えると言い

ます。曾子は孔子の言葉に解釈をつけずに、そのまま語っています。どちらが良いのかと思いますが、孔子の考えをそっくり受け継いで後世に伝えるという点でいけば、そのまま語るのが一番良からうという気がします。自分の解釈をつけると、なかなか難しいと思います。

私はシムックスを28歳の時に創業し、58歳で社長業をバトンタッチしました。30年間社長業をし、16年後にまた復活をしたわけです。復活してがっかりしたことは、創業者として作った経営哲学が棚上げされていました。やはり二代目は、創業者の作った経営哲学を乗り越えたいと思うのでしょうか。しかし完全に消してしまうことは出来ないようで、棚上げになったまま、「シムックス・ミッション」なるものが出来ていました。

企業が100年続くことはなかなか難しいことです。世界的に見ても100年企業は大変少ないのですが、日本にはかなりあります。今、上毛新聞が群馬の100年企業を連載していますが、そういうものを見ても、100年はごく当たり前が続くなと感じます。

私が代表取締役をしている群馬郵便通送も80年以上経っていますので、100周年記念式典には、代表取締役というわけにはいきませんが、出席したいと思っています。群馬郵便通送は名前の通り郵政の仕事を専門にやっている会社で、私は四代目の社長を務めて、その後会長になりました。会社を引き受けた時に氣をつけたことは、創業者がどういう想いでその仕事を始めたのかということです。会社の玄関先に「足るを知る」と彫った大きな石の置物がどんと残っていました。中斎塾フォーラムの理念と凶らずも一緒でした。

したがって会社を受け継ぐ時には、創業者の創業の想い・理念は是非伝えていかなければなりません。100年以上続く会社は、創業者の想いをきっちり伝えている会社が残っていると考えています。先ほどのエビデンスでいけば、明確に証拠が沢山残っています。長寿企業を研究している100年経営研究機構という団体があります。主宰をしておられる後藤俊夫先生の話をお聞きしても、やはり創業者を大事にしなければいけないということでした。1300年以上続いている温泉旅館にも出かけて行って話を聞きました。そういう古い会社を見ると、みな創業者の想いを連綿と伝えています。途中で変えた所は、やはり幕を下ろしていると実感します。

論語に戻りましょう。ご存知の通り、論語は孔子の言行録です。当然、孔子が書いたわけではありません。孔子の話を聞いた弟子や孫弟子、その話を受け継いだひ孫弟子・・・孔子の考えを受け止めて、よく解釈をし、それをまた弟子に伝えていくという流れで論語は出来上がっています。

私の論語の読み方は文章を黙読し、次は声に出して音読をする。それを続けているとだ

んだんイメージが自分の心の中に出来上がって、あたかも孔子がそこにいるような感じで読むことが出来るようになります。情景をイメージして素読をし、それを現代に置き換えて理解していくのがよろしいと考えています。

では、一章ずつ解説をしていきましょう。

そうし いわ どうどう ちょう とも なら じん な がた
【十六】曾子 曰く、堂堂たるかな張や。与に並びて仁を為し難し。

曾子が言うには、私の友人の子張は体格もよく威風堂々としている。ただ問題は、一緒に仁を行うことは無理だ。

・・・子張は横柄な態度で、自分を立ててくれない。子張が仁を為そうとする時、傍にいと自分は大変みすばらしく見えるから嫌だと言っています。

レジュメに、「河井継之助が言うには、佐久間象山は押出しが立派だが師と仰ぐ気にはならない」と書きました。河井継之助は佐久間象山の塾に通っていました。象山は風采が立派で押し出しもよくて素晴らしいが、偉そうにそっくり返っている。これは頭を下げて話を聞く気にはならないと感じて、弟子入りはしなかったという話があります。

会社や組織でも同じです。仕事をする時、或いは何か良い事をしようという時に、あの人と一緒にやりたいと思う仲間がいればよいですね。ここは、一緒になって行動できる仲間がいるかないか、そうお考え戴ければよろしいでしょう。「類は友を呼ぶ」という言葉があります。仲間が仲間を呼ぶ、そういう人間関係でありたいものだと感じました。

ちなみに私は今、「河井継之助（つぎのすけ）」と言いました。故郷の長岡市には河井継之助（つぎのすけ）記念館と、亡くなった福島県只見には河井継之助（つぐのすけ）記念館があります。なぜ読み方が違うのか、氣になった方はお調べになるとよろしいでしょう。佐久間象山も同じです。「しょうざん」と読む方と「ぞうざん」と読む方がいます。どちらが正しいのかという論争があります。西郷隆盛は、人が呼んでくれるように呼んでもらえばいいのだと言っています。隆盛という名前も、実は父親の名前です。人が間違えて「隆盛」と呼んだら西郷さんが返事をするものだから、そのまま「隆盛」で定着をしまったわけです。弟の西郷従道（つぐみち）も同じ流れのようです。西郷さんは名前を8回も変えていますから、本人はどういう名前と呼ばれてもよかったということでしょう。後世に定着したのが「隆盛」です。

話が逸れましたね。このように一つの文章を眺めていると、ちょっと引っかかる所が出

てくると思います。氣になるものがあつたら、どうぞ調べて下さい。調べても分からなかったなら専門家に聞けばよい。そういう感覚で論語を素読するとよろしいでしょう。

そうし いわ われ こ ふうし き ひと いま みずか いた ものあ かなら
【十七】曾子 曰く、吾 諸れを夫子に聞けり。人 未だ 自ら致す者有らざるなり。必
おや も
ずや親の喪かと。

曾子が言うには、私はこれを孔先生にお聞きしました。

人はギリギリの状況にならないと、自分の本当の力を出しきることが出来ない。普通の人が自分の気持ちを極限まで突き詰める感覚になるのは、親が亡くなった時だろう。

自分自身に置き換えて考えると、大往生を遂げた場合は、極限までという感じはしませんでした。父親は80歳、母親は97歳で亡くなりましたが、結構な年齢まで頑張ってくれたと坦々と親の死を受け止めることが出来ました。どうしても受け止められなかったのは、逆縁で娘が亡くなった時です。「人 未だ自ら致す者有らざるなり」という体感をしました。食事をしても、砂を嚙むと言いますが、何も味がしませんでした。車で走っている時に涙で前が見えなくなり、慌てて車を停めて心を落ち着けてから走りだすことが何度もありました。最近、そういうことをしないで済むようになっています。

極限までという体験をもう一つ申します。私は会社の中で合氣道をベースにしたストレッチを教えています。合氣道はシムックスをスタートさせてから、社員の人たちが歳をとっても身に付けられる武道はないかと考えて始めました。大学時代の同期の友人が合氣道の先生をしておりましたので、友人とその師匠に頼んで、朝で昼でも夜でも自分が教われる時に道場に出かけて行って、二人の先生に無理やり時間を作って戴いて教わりました。1年くらい経って、本来なら2、3年はかかるのですが、昇段試験をして戴きました。昇段試験では10人くらいが円陣を組んで、次から次にかかって来るわけです。その頃は私も力がありましたから、力任せに投げ飛ばしていましたが、そのうち疲れてふらふらになってへたり込んでしまいました。ところが、どうにもならなくなって力が抜けてしまったら、合氣道の技がかかるようになりました。動けなくなっているような状態でも投げる事が出来たのです。その時先生から、「力づくでやっているうちは覚えませんが、本当に極限まで力を出し尽くすと合氣道の技がかかります」と言われたことを、この論語を読んで思い出しました。

もう一つ、中斎塾フォーラムの参与、中里麦外先生に聞いた話をご紹介します。中里先生は書道展に出品する書を書く時には、5日間くらい一心不乱に墨をするのだそうです。だんだん指の感覚がなくなって、終いには腕の力がなくなるくらいまで墨をすり続ける。そして、墨がたっぷり溜まったところで、筆にどっぷりつけて畳一畳くらいの紙に一氣に書くそうです。力がなくなっている腕でも、その時は力が出るのだそうです。・・・この話と繋がりますね。力を抜かないと、自分の字（書）が出てこない。自分に身に付いた悪い癖を全部取っ払わないと、良い字が書けないということのようです。

周りを見渡しても、一定の域まで達した人は、自分の身に付いた <力づく> をどこかで振り落とす。そういう体験を積んだ結果、専門家としての道を歩んでいくのだと感じています。自分自身でもそう感じるし、他の方もそうだと思います。

ということで、この章を会社の会長や社長で考えれば、会社が潰れそうになった経験を持っている人は強いですよ。会社が順調に伸びて行って、倒産するかもしれないという思いを味わっていない経営者は、危ない。本当に危ない所まで行って、それを復活させた人は強い。そう思ってこの論語を読みました。

そうし いわ われ こ ふうし き もうそうし こう そ た よ そ
【十八】曾子 曰く、吾 諸れを夫子に聞けり。孟 荘子の孝は、其の他は能くすべし。其の
ちち しん ちち まつりごと あらた こ よ がた
父の臣と父の 政 とを改めざるは、是れ能くし難しと。

曾子が言うには、私はこれを孔先生からお聞きしました。

孟荘子の親孝行は誰でも真似が出来る。ただし、父親の重臣と父親の政治の仕組みを変えなかったことは、誰にも真似出来ない。

会社で考えましょう。父親の社長が死んで自分が社長になったとします。父親の経営方針を受け継いで、それを改めずに父親のやったことをその通り実行しようとするのは、なかなか出来るものではない。

論語の学而篇 11 章と里仁篇 20 章に、「三年父の道を改むるなきを、孝と謂うべし」という章句があります。三年間は父親の役に立ってくれた重役たちに同じように手伝って貰い、仕事の仕方も変えない。これはなかなか出来るものではない。ただ、孟荘子の親孝行は実行したことにあると孔子は言っています。3年間とありますが、孟荘子は死ぬまで実行し続けたから、名前も残っているのだと思います。

渋澤栄一の場合は、表面だけ捉えたのでは親孝行をしていないという事になります。栄一は親のやっていた藍玉商を継がずに、義理の弟に継いでもらっていました。父親が亡くなると、弟を説得して即座に家業を畳んでしまいました。親だったら上手く時流を乗り越えることが出来るかもしれないが、弟には無理だと考えたからです。確かに時流が逆風になったので、弟は、そのまま親の仕事が続けていたら倒産だったと後で大変有難がったという話が残っています。栄一は後に、親の精神は受け継ぐ、それを活かすために親の商売は畳んだのだ。これは親孝行を実行しているのだ・・・という話を残しています。

ご自分が会社の中で重役の立場にある方は、先代が亡くなった後にどういう道を選ぶか、もちろん受け継いだ社長の方針により違ってくるとは思いますが、この話も参考にされると良いと存じます。また、先代社長の志を受け継いだ二代目・三代目の社長は、栄一流に精神を受け継ぐのか、仕事を更に発展させる方向に行くのか等々、お考えになるとよろしいでしょう。そのようにこの論語を読んでみましょう。

ちなみに私は、精神を受け継ぐ方が良ろしいと思っています。精神を受け継ぐ中で、能力があれば、親の残した仕事を更に発展させるがよいと思います。それには、<親だったら、この仕事をこう発展させていく> と考えればよいでしょう。

中斎塾フォーラムの組織で考えると、7月に顧問の安岡正篤先生が亡くなりました。それから、郡山茶話会の設立にあたって大変ご指導を戴いた渡邊五郎三郎先生も亡くなりました。亡くなられた先生方のものの考え方・精神を受け継いで、更に発展させてゆければよいと思っています。

恒例の質問

恒例の質問に参ります。ズームで参加しておられる方も、手で大きな○や×を作って下さい。コロナ禍という感覚でお考え下さい。

○ 最近は、良い日がずっと続いている方

念押しをしますが、これは客観的に聞いておりません。主観で、良い日が続いていると思えば○です。嫌な事があったなと思っても、忘れるようにすればよろしい。夜寝る時に、良い日だったなと思って眠ると、翌朝氣持ちよく起きられます。逆に、腹を立てながら寝たら、寝ながら頭の中が沸騰しているかもしれません。

○ ここ最近、嘘をつかない日がとても多いという方

○ ここ最近、有難うと言い、有難うと言われることが多い方

私は赤城にこもっていると、人に会わないし電話も来ません。パソコンも置いてありませんから、有難うと言う機会がありません。そこで思い出したのが田島監事にお聞きしたことです。田島監事は朝起きると、頭に有難う・目に有難う・鼻に有難う・・・と、身体のあちこちの部分に言っておられるのですよね。

身体も、有難うと言われると活性化するようです。私は朝起きると、手を擦ったり、頭や顔を揉んでいるので、その時に「有難う」と言って擦るようにしてみました。

○ ここ最近、身体の手入れをよくやっていると思う方

身体の手入れをしないと、歳をとってからおかしくなります。私は58歳の頃、身体がどうにもならなくなって、毎日冷えピタを額に貼って仕事をしていました。60代は医者から「死の四重奏」といわれるような病名を沢山もらいました。若い時に身体の手入れをしていたつもりでも、そういう事があるわけです。私の母親は80代の頃、医者から「身体がお若いけれども、何かスポーツをしていたのですか」と聞かれたそうです。母親は40代、50代に散歩を毎日2、3時間やっていました。それが身体の貯金になっていたようです。今日は若い会員さんも聞いておられますが、若い頃に身体の手入れの貯金をしておくと、60代、70代になって生きてきます。

○ ここ最近、自分磨きをよくやっている方

自分磨きについては、五事を正せばよいと申し上げます。自分のためになる本を読む、自分のためになる人と会う、話を聞く・・・そのように自分磨きをされると良いと思います。これは、陽明学では「事上磨錬」という言葉で表しています。

最後の質問は、昨晚眠る直前です。

○ 将来やりたい事を、<これが出来て良かった>と思って寝た方

前回は申しましたが私の場合、中江藤樹が終わって次は西郷隆盛と決めていますので、<西郷隆盛の本が出来上がって出版された。良かったな、嬉しいな> と思って寝るようにしています。本を書きたいとか、書ければいいと思うのではなくて、<西郷隆盛が出来た。ずっしり重たい。良かった、良かった…> そう思いながら寝るようにしています。

令和3年を考える

ではテーマに入ります。時事評論も一緒に致しましょう。

○ 辛い・苦しい・むごい年回り

20年前の9.11で生き埋めになった方の遺族の皆さんは、辛い・苦しい・むごいを味わったと思います。10年前の3.11、東日本大震災の場合も同じです。自分自身がそういうものに直面しないと、味わえないものだと思います。

○コロナは一步一步人間社会に入り込み、しっかり地歩を固める年回り

コロナはもう人間社会に定着をしました。マスクをするのも当たり前、ワクチンも打って当たり前になりました。ワクチン接種には「7割の壁」があるようです。先進国でも70%以上の国民がワクチンを打った国は、まだないわけでしょう。今は、ワクチンを3回目接種という話が現実的になりました。4回という国もこれから出るのでしょうか。

シムックスでも本社屋でコロナの陽性者が出ました。現在は仕事に復帰しています。もう、会社の中では社員がコロナに罹るのは当たり前だという感覚になっています。ですから陽性者が出た場合、会社としてどう対応しなければならないかということも、坦々とやるようになっていきます。どこの会社でも一度陽性者が出ると経験をするわけですから、ごく自然に対応が出来ると思います。

ということで、自分自身でコロナに罹ったらどうするか、会社で陽性者が出たらどうするか、常識として身に付けておく状況になっていなければいけません。そうお考え戴ければ宜しいでしょう。

○一気に落ちてゆく人々と、一気に駆け上がる人々が生まれる

前回、岡本理事長がコロナ後のビジネスモデルとして「ビジネスの仕組みを売る」という話をされました。シムックスの中でも、こんな動きが出ています。或る会社から、大きな工場の中で実際に現在何名の社員がいるか、個々の社員まで分かるようなシステムを作ってくださいと依頼されました。今取り組んでいる最中です。これも仕組みとして作って提供しなければならないという状況にきています。

お時間になりました。以上で講話を終了致します。有難うございました。